

平成 28 年度 園芸特産業関係功労者表彰 受賞者功績概要

(敬称略)

上田市丸子農産物直売加工センター運営組合 (上田市)

平成13年、地域初の大規模直売所設立に向けて、生産者や関係者により現組合の前身である「農産物直売施設研究委員会」として活動を開始し、平成15年に現組合として設立。同年上田市御岳堂に開設された農産物直売所「あさつゆ」を通して、実需者や消費者の様々なニーズに応えた結果、組合員が生産する農産物の品目が年々増加（220品目以上）するとともに、新品目も積極的に導入してきた。

また、農産物直売所の課題とされた「安心・安全」の確保に対して、「直売所GAP」をいち早く導入、定着したとともに、給食センターへの農産物供給による「地産地消」等の取組は、他の直売所や生産グループの模範となった。

一方、SNSの活用から早くから着手。タイムリーかつ多様な情報を組合員、消費者へ提供したことで、直売所組織の新しい情報発信手法として、先駆的な役割を担った。

上野農事大根組合 (諏訪市)

昭和5年に現組合の前身である「上野大根採取組合」が設立。昭和38年に「上野大根組合」に組織替えを行い、平成26年に現組合名に名称変更した。

諏訪市上野地域で300年以上の栽培の歴史を有する在来だいこん品種「上野大根」の存続を図るため、県、市、JA及び信州大学と連携して「諏訪湖姫」をF1育種法により育成（品種登録）した。

これにより、種子の生産性が飛躍的に向上し、形質が揃ったことで作業効率や市場価値が大幅に高まったとともに、栽培基準の作成、減肥栽培化や連作障害対策等の取組により、伝統野菜の伝承、普及に大きく貢献した。

また、「信州の伝統野菜」としていち早く認定され、当該取組は全県的な伝統野菜の復興と地域振興の模範的存在となった。近年は、各種イベントを通じた「食育」活動を展開する他、消費者や実需者と連携して新たな利用法についても模索している。

片桐 敏美（飯島町）

昭和47年に就農。りんどう、新鉄砲ユリ生産等を経て昭和50年代前半、国内では殆ど栽培事例がなかったアルストロメリアを地域に先駆けて導入。

実用栽培と専作経営化に成功した後、平成9年に地域の生産者仲間らと「日本アルストロメリア研究会」を発足、初代会長に就任し現在に至る。

生産技術に関しては、アルストロメリアの周年出荷体系を図るため、本県で最初に「地中冷却技術」を導入。本県の気象環境に即した技術を確立したことで、生産量が飛躍的に増加し、現在、生産量全国第一位に成長した本県アルストロメリアの産地形成に大きく貢献した。

また、平成20年に「上伊那花卉生産者会議」の会長に就任し、急騰をはじめた燃油価格の高騰に対応するため、ヒートポンプや薪ストーブの導入を進め、花き農家の経営安定と化石燃料の使用削減に尽力した。

草尾農業団地生産組合（生坂村）

昭和60年、生坂村の主要産業であった養蚕の衰退と荒廃農地が増加する中、4名の養蚕農家が核となって未経験の巨峰栽培の導入を開始。昭和62年までの3ケ年でぶどう棚を8haに拡大させたとともに、品質の高さをセールスポイントとした「山清路巨峰」のブランド確立に成功した。これらの取組により、村内全体にぶどう栽培が波及。ぶどう栽培が村の主要産業へと成長する礎を築いた。

また、従来 of 市場出荷一辺倒を見直し、「巨峰祭り」の開催や観光農園等による直販、通信販売などの多チャンネル化を推し進めた結果、農家の経営安定と村の経済発展内に大きく貢献してきた。加えて、中山間地の多くが後継者不足に悩む中、組合員である村農業公社との連携により早くから新規就農者の確保育成に着手し、若く、意欲溢れる組合員を数多く育成、地域に定着化させた。

武田 幸悦（中野市）

昭和43年に就農。当時、りんご主体であった経営にぶどう「巨峰」を導入。加温栽培等に意欲的に取り組んできた。平成2年には、果樹経営の複合化を図るためさくらんぼを導入。独自に開発した栽培技術により収益性を高める一方、市場出荷中心の産地において観光農園による新たな経営展開を自ら先導、産地全体に定着させたことで、中野市並びに長野県におけるさくらんぼ産地の形成に大きく寄与した。

一方、有核巨峰が低迷する中、いち早く「シャインマスカット」を導入。果樹試験場により、当該品種の現地適応性を評価する試験園地に選定される等、現在、長野県が生産量が全国第一位となった「シャインマスカット」の栽培技術の確立、普及に大きく貢献した。

また、地域の専業農家4戸で「(有)たかやしろファーム」を設立し、生産から醸造、販売までを一貫して行う先駆的な取組として、「信州ワインバレー構想」の一翼を担ってきた。